

# 理論の党派性の問題並に党派性イデオロギーに就て

加藤 正

## 目次

- 第一節 理論の党派性に関する説
- 第二節 党派性イデオロギーの哲学的科学的研究に於ける影響
- 第三節 党派性イデオロギーの階級的党派的实践に於ける影響
- 第四節 (結語) 客観的無党派の理論研究の意義

この手記は一方では革命的思想の更新のための哲学的基礎を考察したものであり、他方では無党派のな純粹な理論研究の成立する根拠を論じたものである。この問題に積極的な関心を持たない者にとってはこの手記は何の意味もない。

理論の党派性の問題は特殊的には昭和八年二月五日唯物論研究に於て私の提起したに始り、左翼哲学界の中心論題を成し最後に十一月五日に到つて、唯物論研究会に於て討論が行われ、私の主張が公式に否定されることになつた。その決算的報告は「唯物論研究」第十四号に掲載された。然しこれは同会の哲学研究会部内に於て私と反対の意見が支配していることを意味するのであつて私見が謬論であることを意味しない。この研究会の討論には、私自身は十一月二日に検挙されたため参加できなかった。この問題に関して発表された限りでの拙稿は、

「唯物論研究」第六号 わが弁証法的唯物論の回顧と展望

「同」 第十号 理論の党派性に就て梯氏に

「同」 第十二号 批判に答えて

「同」 同 号 エンゲルスと自然科学研究

の四篇。私の反対者、批判者の中からは、ただ次の二篇を挙げるに止る。

「何を讀むべきか」昭和八年八月号 船山信一、唯物論研究に於ける党派性論争に就て

「唯物論研究」第十四号、山岸辰蔵 理論の党派性に関する討論の「決算」の爲めに

然しながら理論の党派性、或は階級性の問題は一般的には、もっと古い歴史と広い影響とを持つものであつて、この問題に関する誤つた意見が、吾々の間に於ける革命的思想を支配し來つたのである。便宜上この誤れる意見を党派性イデオロギーと呼んで置こうと思つ。

以下の記述は単に覺書に過ぎず、推敲を経ない草案に過ぎないが党派性イデオロギーの何ものたるかに就いて何程かの概念を得ることは出来よう。また党派性イデオロギーと私見との対立点を明かにするのが主眼であるから私見の正当性の論証は充分でない。

理論の党派性の問題には二つの意味がある。

第一の意味は、理論上の諸説には必ず学派的な対立があるということであつて、例えばエンゲルスやレーニンは諸学説が最も根元的には認識論的立場の相違に従つて唯物論的と観念論的とに二大別されることを指摘している。

第二の意味は、理論上の諸説は理論的ならぬ実践的社会的立場に従つて夫々異つて来るものであるということであつて、諸学説は最も根元的には社会層、社会階級、階級的社会党派の諸対立を反映し、例えばブルジョア理論、ファシスト理論、プロレタリア理論という風に大別されるという主張である。この主張からすれば唯物論的及び観念論的という認識論的立場自体も、更に根元的には相対立する社会的党派の立場に還元される。例えばプロレタリア的階級党派は、ブルジョアの階級党派の理論たる観念論に対立して必然に唯物論をとるといふ風に、これに就て少し考えて見よう。

真の科学的理論即ち科学的真理は唯一つしかない。このことは總ての理論家の所説の前提となつてゐる。その際学説上の対立、主張の対立は何を意味するか、それは一方の学説が正しく、他方の学説が誤つてゐることを意味する。(双方とも誤つてゐる場合は論外として)、

然らば正と誤、真と偽の区別の基準はどこにあるか、更に正しい理論と誤れる理論との区別の生ずる根拠はどこにあるか。

先ず理論の正否或は真偽の検証の基準に就て。この基準は実践にある、即ち吾々が理論の正否を知るのは、その理論を實際に当て嵌め実際の事態の発展や関係が其理論の示す通りであるか否かを検することによつてである。因にこのことは疑のないところであるとしても、このことの合理的な意味が曲解され、忘れられる場合があるのは否定し難い。例えば実際の事情が一定の理論の破綻を表示しているにも拘らず、その理論的觀念に合致する方面ばかりが実験者(又は実践者)の意識に登り、全体としての事情が自己の理論的觀念に合致しないことが分らないで、自

己の理論は実地検証によつて正しいことが証明されたと考える類である。然しかかる理論、即ち単に一面的な真理も長い或は反復する実験或は実践の過程には正しく検証されるに到る。そしてより全面的な真理の勝利が結果する。次に正しい理論と誤れる理論との区別の生ずる根拠に就て。これに就ては必ずしも一致した見解がない。理論の真偽、正否の分岐の根拠が理論の形式の過程そのものの中にあるということはいうまでもないとしても、理論の形式が如何なる基礎の上に如何なる過程に依つて行われるかに就ては必ずしも一致した見解がないのだ。或場合には学者が自説の正当性を擁護するために正誤の分れる根拠に就て我田引水の議論を為し、自説は正しい理論を生み出すべき基礎の上に立つが故に正しい理論であり少くも正しい傾向にある理論であると論弁し、その結果実際の事情の推移が彼の理論の破綻を表示しているにも拘らずそのことが意識出来ないで、誤れる觀念にどこまでも固執するに到るような場合も少くない。

真の科学的理論の形成の法則、即ち形成の基礎と過程とに就ては、一般的に次のようにいうことができる。科学的理論の正否、その真理性の検証は実践にある。実践によつて即ち実際に適用して検証された觀念は正しい觀念である。こつう諸觀念、諸理論は個々の事物、個々の変化、個々の運動、個々の分野に就て獲得され、蓄積され、それ等は總て人類の知識の共有財産となつてゐる。真の科学的理論の形成は、かかる人類知識の共有財産の基礎の上のみ行われるのだ。即ちこれらの知識の蓄積を専有しまた新しい実験（実践）観察によつてこの蓄積を豊富にし、それらを整頓し、それらの相互關係を明かにし、更にその相互關係の理解を実地に於て検証し、新しい相互關係の発見があればこれを包括し一層広汎な多様な複雑な相互關係の理解に進むという手續によつてのみ行われるのだ。

真の科学的理論の形成の法則は、他面から見れば、人類の理論的思惟の發展の法則であり、また人類の認識の發展の法則である。この法則を明かにすることは、一般的には哲学の、特に認識論、論理学、或は純理哲学の本来の課題であつた。この哲学の成果（特にカントからヘーゲルに到るドイツ弁証法哲学）に基いて真の科学的理論の形

成過程の法則、乃至人類の理論的思惟、人類の認識過程の法則を略説すれば、最初の段階は対象或は存在に目を注ぎその対象の直観（直接的感覺的印象）を取得することである。対象の感覺的印象は、直感の中で対象の本質に還元される。即ち感覺的印象の質的多様性が分解され、その中から等質的な従つて量的規定の可能な部分を取り出される。質的多様の中から計量的に明かにされた等質的關係、これが対象の本質をなす。対象の本質が認識されるに及んで、理論の形成は次の段階に上る。即ちこの本質に基いて対象の屬性や現象が規定され、原因と結果、能動と受動、力とその發現等の關係が明かにされる。思惟のこの段階を哲学は悟性と呼んで居る。悟性は個々の事物や出来事の本質や因果關係を明かにする能力である。理論の發展の第三の段階は理性と呼ばれる。これは個々の事物や作用の本質の理解（悟性的認識）に基いて対象的存在の個体的部分や個所の方面の相互連關を明にし、対象的存在の全体的な認識を漸次に達成して行く能力である。悟性は判断を通じて理性に發展する。悟性的段階に於ては、理論的思惟は全く対象的存在の個々の部分や方面に關わるに過ぎないのであるから、対象的存在の全体的法則はその視野の外にある。従つて悟性的思惟が対象を全面的に明かにしたと信ずるならそれは結局部分的な一面的な理解を以てこれが対象の眞の姿であると宣言するに異ならない。象に触つた盲人が夫々象は壁、太い柱、扇、長い管、曲つた槍等々であると言ひ張つたという故事があるが、象の本来の姿は壁のような胴、柱のような脚、扇のような耳朵、長い鼻、大きな牙を持つた動物である。盲人の言には夫々一部の眞理はあるが、全体的に誤つて居る。悟性的認識は大体かような性質を持つものだ。それは対象に当りをつけ個々の性質、個々の部分を謂わば分解して明かにする。換言すれば悟性は感覺的に与えられたものの個々の諸規定を直接その感覺事物に就て明かにする能力である。理性は悟性が明かにした個々の諸規定の内面的な相互關係を理解し、対象的存在の全面的な發展法則を把握する能力であつて、最近の哲学及び科学は、対象的存在の内面的連關、全面的な發展が、弁証法的であることを明かにした。即ち一定の形態の下で存在が發展し、この發展に連れてその形態が發展する存在を全体的に盛り切れなくなり、個々

の部分盛る諸形態に分化し、分裂し、対立し、その存在の内容を調和的に（統一的、全体的に）包括する新形態が生れるに及んでその存在はこの新形態の下に次の発展に移るといふ仕方である。理性は対象の弁証法的な発展法則を認識する能力であつてそれ自身がまた弁証法的に発展する。即ち悟性が明かにした諸規定は相互に分裂し、対立しているが、理性はこれらの諸規定をば判断作用を通じて、それらの分裂し対立せる規定を内面から統一する存在を想定する。悟性は飽くまで即物的、即感覺的、即經驗的であるに反し、理性は（換言すれば弁証法的思惟は）感覺的对象を支配する法則に即してそれを把握する。悟性は個々の経験に左右されるが、理性は経験を予断し、発展の将来を理解する。悟性は対象の発展の個々の徴表を受動的に与えられるままに把握するに對して理性は対象の全面的な発展を把握し、発展の方向を理解し、対象の発展に對して謂わば目的意識的に係る。対象的存在の内面的な法則の根本形態は機械性であり、機械性が一定の封鎖体系の中に統一されて働く形態（例えば生物体の法則）が有機性であり、更に有機的法則が一定の目的を追う意識の下に規制されて働く形態は目的性である（例えば政治的法則）。理性はこれらの法則を、従つて自然及び人間歴史の全体的な運動法則を把握する。

右が理論的認識の法則であり、真正の科学的理論はこの法則に従つてのみ形成されるのである。誤れる理論は、この法則、この過程を偏倚したところから生れる。部分的理解と全体の理解とをすり、変えること、悟性的把握をそのまま固定して理性的認識に高めないこと、これらはすべて、誤れる又は一面的な理論、事物の眞の発展を指示しない理論の生ずる根拠である。

科学的理論の形成の基礎と法則に就てこれと別個の見解を検討して見よう。理論の党派性に関して、前記の第一の意味を理解するものは、理論の形成法則に就て右のような見解を持つものであつてその際唯物論とは思惟の法則に従つて対象そのものの弁証法的連関を把握したもの、觀念論とは思惟の発展法則の全段階を経ず途中悟性的理解に停滞しその殻を脱し得ずにいる理論という風に考えるものである。然るに理論の党派性に関して前記の第二の意味

(前述)を理解するものは、即ち理論は特定の社会的諸集団(階級、或はその政治的党派またときには民族)の利益のための、または自己主張、自己形成のための闘争の実践に適應してのみ形成され、それに適應することによって、その集団にとつての真理が生れるという主張の上に立つものだ。この立場は科学的真理は唯一つしかないという思想と一見矛盾するように見える。が然しこの立場はまたこの立場としてこの矛盾を解決する道を持っている。即ちこの立場にある論者は自己の所屬する社会的集団又は党派とその自己のための闘争の實己との性質に就て一定の觀念を造り上げ、自己党派の実践の優越的意義を説明し、それに基づいて他の党派の真理に対する自己の党派の真理の優越性を主張するのだ。

以下問題を特にプロレタリアートの党派の理論として主張せられているもの(便宜上これを党派性イデオロギーと呼んで置こう)と關係せしめて右の立場を検討しよう。

理論は実践の中に於てのみ形成されるという命題は真理を言い表している。理論の眞理性の検証は実践にあるのだ。即ち、一定の理論の正否はその理論の指示するところに従つて現実事象を實際に運動せしめ、相互に關係せしめ、或はそれ等の運動や關係が行われている場所を實際に觀察し、その事象がその理論の指示の通りの法則を示すか否かによつて決するのだ。眞の科学的理論の形成は、実践(実験、觀察、実地検証、一定の觀念を實際に移して見ること)によつて確定された実証的知識を基礎とし、それを手掛りとしてのみ行われるのだ。実践から切り離されずには理論はその場で停滞する。人間のあらゆる種類の実践は、直接間接に理論の検証としてまた理論の發展的契機として役立つのである。実験室の実験、探検旅行、医術や工芸等の諸技術、農業や工業等の生産業、これらの人間実践は自然諸科学の形成と發展の基礎であり、諸経営、政治、社会的闘争等は社会的、歴史的科学的形成の發展の基礎をなす。然し乍ら「実践」は理論の基礎たるに過ぎないのであつて、即成の理論にとっては検証者となり、新らしく形成さるべき理論にとつては個々の経験材料を与える提供者となるに過ぎない。この基礎の上に理論は如何

なる過程を経て形成されるかの問題（認識発展の内的法則、頁<sup>マ</sup> 一七二頁（3 6頁）はこの「実践」によって説明することは不可能である。

ところが否、決して不可能ではない、と党派性イデオロギーは言う。党派性イデオロギーにとっては、「実践」こそそれを説明する唯一のものである。何故ならば理論はそれぞれの党派の「実践」に規制されそれに適応して形成されるといふのがこのイデオロギーの本質だからである。この種の論者は理論の形成の内的過程をまで規定する「実践」として次の如きものを持ち出す。即ち

第一に、特定の階級または社会集団（今の場合はプロレタリア階級）の自己の利益のための闘争の「実践」

第二に、これが更に統一化され意識化されたものとして、その階級の政治的党派の闘争の「実践」

それに従つて、論者は理論の階級性及び真理性を唱えるのだ。この「実践」が理論の真理性の検証としての或は理論のために個々の経験事実を供給するものとしての実践と質的に区別されるべきものであるのは言うまでもない。論者は別々の意義と内容を持った二つの概念を混同し或はすり変え「実践」という言葉の外観によつて論理的手品を行う。例えば「実践」に適応して、その党派にとつての真理が生れるとしても、「実践」の立場にある限りはその理論は「実践」による検証に耐え得るものだ、即ち党派の「実践」に適応した、その党派にとつての主観的真理も同時に検証された客観的真理としての意義を獲得するという論理がその一つの例である。この論理の手品は今更説明するまでもなく明かであるように思われる。理論の形成の真実の基礎たるべき実践は人類の歴史的、社会的な總実践である。今プロレタリア階級やその党派の闘争の実践に就ていえば、真実の理論は人類の従来歴史の内的法則を明かにし（唯物史観）プロレタリアートとその他の階級諸党派との対立の根源、対立を發展推移せしめる條件を分析しプロレタリアートの勝利の可能性と勝利の條件を闡明する（<sup>せんめい</sup>）という手續によつて樹立されなければならぬ。従つてその際理論の基礎として摂取されなければならぬ。実践とは、人類の従来歴史的、社会的、政治的活動の



一切の成果、一切の経験である。プロレタリアートの闘争の實踐に適應し、その實踐を導く理論（科学的社會主義の理論）が右の手續によつてのみ形成されるとすれば、プロレタリアートの實踐はただ、その理論の正否を検証し、理論に新たな経験を提供するに過ぎないのであつて、理論を樹立する内部手續をまで左右するものではない。理論は従来の人類の経験の上にこの新たな経験を加え、より豊富な経験を基礎として自己固有の手續（前述）によつて深刻化して行くのだ。党派イデオロギーの論者は「實踐」という言葉によつて實踐の二つの規定を混同し、自己階級党派の實踐がまた理論の形成の基礎であると考えると同時に、理論の形成の過程も、また自己党派の實踐の發展過程に規制されると考える。

このことから、實踐の發展過程に対応し、その發展法則に規制されながら形成される理論なるものの性質を明かにすることが出来る。レーニンはその著「何を為すべきか」の中でプロレタリアが自己の利益のための闘争の實踐の中で形成する理論には明白に一定の限度があることを指摘している。即ち自己維持自己の利益のための闘争には一定の團結、階級的結合が必要であるとの意識がそれであつて、それ以上の意識、例<sup>たと</sup>えばこの闘争に終局的に勝利するための條件、その條件に基づく闘争の形態等の理解は階級關係の歴史的な法則の認識が前提されなければならぬので、實踐の中からはそのままでは生れて来ない。この後者の意識、即ち科学的社會主義の理論は、階級党派の中に於ける實踐からこの實踐に觸撥され、この實踐と平行して、生れたのではなく、対立諸党派の闘争の客觀的條件の研究の中から生れたのであるが、研究のためには従来の諸學說の全體的な消化が必要であり従つて科学的社會主義の理論は党派的对立闘争の實踐の外で形成されるのだ。そしてこれがこの實踐の指導理論として、この實踐の中へ持ち込まれるのだ。理論の發展と實踐の發展とは夫々別<sup>それぞれ</sup>の法則と條件を持ち、理論の形成に於てプロレタリアが参加するとしても、それは決して實踐者としてのそのままの資格に於てではなく、研究者としての資格、インテリゲンチヤとしての資格に於てである。以上はレーニンの有名な主張である。換言すればプロレタリアートの闘

争は資本主義の諸前提の下に歴史の發展法則に従つて發展するに對し、科学的社會主義理論は、理論的思惟の發展法則（科学的理論の形成法則）従つて發展し、プロレタリアートの闘争の歴史法則の把握を深めて行くのだ、これに對して今党派性イデオロギーが、党派闘争の實踐と平行しその中から形成される理論なるものを説教するとすれば、それは如何なるものであるうか。答は簡單である。曰く、即經驗的、だが理性的認識、弁証法的連関の理解に欠けた意識。党派の闘争の實踐は實踐者の前に諸々の經驗を齎らす。闘争の個々の場面、個々の部分、個々の出來事を理解する能力（即ち悟性）は日常の意識にも具わつてゐる。然しこれらの個々の事柄の理解から歴史の弁証法的法則を引き出す能力は理性の能力であつて、もはや日常意識には具わつてゐない。理論は經驗の總括である。然し總括のためには總括する思惟（理性的弁証法的思惟）を要するのであつて、而もこの思惟は生得でもなければ日常意識の中に具わつてゐるでもない、それは二千五百年の科学と哲学の發展を通じて鍛鍊されたものである（「反デューリング論」第二版への序文参照）。理論的な弁証法的な思惟を欠いた意識は、個々の經驗を相互に、内的連関なしに、個々ばらばらに受取る意識である。即ち悟性的意識である。この意識は實踐の諸特徴、諸側面を個々に理解すると同時に實踐の段階段階に應じてそれらの諸側面の相互關係が推移するに伴つて、その相互關係の理解も變つて来るのだ。確かにこの意識は實踐に規制され、實踐に適應して形成される。一つの理論が形成されるのは、思惟の内的過程によつてでなく、その時々の実踐の外面的様相の直観によつてである。精々直観内容に理論的規定を加えることによつてである。一つの理論が次の理論にとつて代えられるのは、次の段階の実踐の外面的様相の直観が前の段階のそれと異つてくるためである。理論はかくして變化し、深化し、轉化してゆく。従つて悟性的意識、換言すれば通常の日常意識の立場からすれば、理論の形成と發展の過程は全く實踐と並行し、相對應する。これが党派性イデオロギー、即ち、理論は全く党派の実踐の所産でありそれに規定されたものであると為す立場から見た理論の意義である。党派性イデオロギーは理論に就てこれ以上の意義を理解出来ないのだ。こういう理論が果して

理論としての価値を持つているか否かは疑問である。真の理論は、実践に規制されるのではなく、実践を指導するものでなければならぬ。謂わば実践を規制するものでなければならぬ。実践はその段階段階の実践の様相を軸とした回転するものではなく歴史の内的弁証法的法則に支配されるとすれば、実践を合目的に導く理論は、実践の様相に規定されて生れるものであつてはならぬ。歴史の内的な弁証法的法則を把握するものでなければならぬ。実践のその時々々の段階の諸様相に規制された理論は実践の発展の方向に対して盲目であり実践とともに盲目的に歴史の法則に順したがわせられなければならぬ。然るにこの歴史法則そのものを把握した理論は、実践を支配する法則を意識せる理論なのだから、実践の諸条件やその発展方向を予知することの可能な即実践を導き実践を合目的に規制し得る理論である。ところで個々の事象の理解から対象事象の全体的な聯繫、總括的な展開法則を認識する能力は、日常の実践に於ける意識の中には具そなわつていないのだ。それは悟性の能力でなくて、理性の能力だからである。更らに注意すべきことは、日常の実践に於ける悟性的意識は個々の部分を即經驗的に理解できるが、それらの部分の全体的な相互關係、弁証法的相關を認識できないのだから、古人も述べた様なきよくがくあせ曲学阿世的試み（意識たると無意識たるとを問わず）もこの意識にとつては可能なのだ。従つて実践的立場、党派の利害に、直接間接に対応した党派の理論の形成も可能なのだ。然るに理性は、個々の部分を党派的主觀即ち党派の立場や利害關係に即して整理し秩序づけるのではなく、個々の部分のそれ自身の、党派的主觀から独立した弁証法的相互關係を認識する能力なのであるから、理性の闡明せんめいした弁証法的法則は、党派の視点を超越したものである。従つて如何なる党派の立場から対象に臨もうとも、思惟が認識の法則に従つて理性的把握に立ざる限りは同一の認識、同一の科学的結論に到達するのだ。真の科学的理論は階級性や党派性を超越している。それを担う党派の真理は、即ち党派性イデオロギーは、真の科学的理論、対象の真の認識に、到達していないことを意味するものだ。民族や階級党派に夫々固有な認識法則なるものはない。人類の理論的思惟は總べて同一の法則に従うものである。

党派性イデオロギーは、単なる悟性的日常意識に過ぎない。それは客観的な科学的真理とは別個のものである。従つて諸党派の夫々の党派的真理は夫々に一面的な真理を内包しているにもせよ、相互に優劣を争うことは出来ない性質をもっている。再び先の故事を例にとれば、象は壁のような動物であるという盲人と、否扇のような動物であるという盲人との争いのようなものである。然らば他の党派に対する自己党派の優越的意義を規定し、それに基いて他の党派の党派的真理に対する自己党派の党派的真理の優越性を主張する試み（前述参照）にはどの位の価値があるか。

第一に、他党派に対する自己党派の優越性の規定自身が、党派性イデオロギーの立場に於ては、決して全面的たり得ないという点を指摘する必要がある。党派の本来の使命とその闘争の意義及び條件の全体的な認識のためには、党派性イデオロギーに一步を進めて、理性的思惟、弁証法的思惟の高みに立たねばならぬからだ。

党派性イデオロギーがプロレタリア的階級党派の実践の優越的意義を規定する仕方も従つて個々別々で統一がない。それは党派の動きの個々の様相、個々の方面、個々の表徴を一面的に規定したものに過ぎないからである。その二三の例を取上げて見よう。

プロレタリアートは全歴史の発展方向に沿い、自己を解放することによつて全人類を解放する使命を持つ（或はプロレタリアートは自己の階級利益を主張し通すことによつて、階級的利益一般を止揚すべき使命を持つ）ところの階級である、従つてプロレタリア的真理は党派的であると同時に階級利害に累わされない客観的真理である、とこの論理の手品の種は党派の自己主張、自己利益の主張、自己解放の闘争は、それ自身としては決して實際的に人類解放、階級差別の止揚、即ち社会主義の方向に合致するものではないという点を黙殺したところにある。要するにプロレタリアートの諸闘争を、盲目的な自然成長的な形態に放棄して置いては決して社会主義の方向には発展しないのだ。（レーニンの「何を為すべきか」を参照）、それらの諸闘争を目的意識的に社会主義的解放の方向に規制

し指導するためには、全歴史の弁証法的な発展法則を把握した理論の指示によらねばならぬ。即ち党派の相互対立の抗争の基礎をなし、それから独立した客観的法則を把握した超党派的な弁証法的理論に導かれてこそ始めてプロレタリアートは資本主義社会に於ける単なる反対党派たる地位から社会主義のための、人類解放のための、従って資本主義社会の他の諸党派に優越せる党派に高まること出来るのだ。プロレタリアートの使命に関する右の命題は党派の立場に累たぐひわされない、客観的な理論によつてのみ（弁証法的理論によつてのみ）明かにされるのであつて、プロレタリアートの党派の立場の特異性が理論に働きかけ、それを左右して理論に特殊な形成を与え、客観性を付与するのではない。党派の立場はそれ自身としてはどこまでも主観的であり、党派の階級的対立一般を止揚しやうすべき立場に高まることはないのだ。

自己党派の優越性に関する党派性イデオロギーのいま一つの規定をとつて見よう。プロレタリアの党派は実践的党派である、他の党派がますます実践から遊離し、或は人類の実践の発展の障碍的要素となりつつあるに對し、プロレタリアの党派は飽くまで実践的立場にあり、従つてこの党派の党派的真理は常に実践から生れ、実践の中で検証され、従つて客観的な真正の科学的理論である、と。この論理の手工品の種は、既に述べたる如く（前述）、実践の二つの概念を同一の言葉の下に混合した点にある。理論の形成の基礎となるべき実践の経験は、全人類の実践である。プロレタリア階級の実践にのみ基いて理論を、就中その実践を支配する法則に関する理論を樹立することは出来ない。レーニンの指摘した通り実践的立場から理論は生れない。もしそうだとすれば、たとえ実践の中にあるとしても、その実践によつて何を検証するのか。検証さるべき理論が初めから生れないのに。要するにかかる立場から生れるものは実践の場合場合またはその段階段階の様相の一面を固定化し、理論化した理論に過ぎず、従つて実践を指導するものでなく、只自然発展的実践に追隨し或はそれを後から合理化して行く理論、即ち真正の理論ならぬイデオロギー、党派性イデオロギーに過ぎない（前述す）。最後に現在プロレタリアートが發展せしめた実践

と、他の対立党派例えはブルジョアジーの発展せしめた実践とを対比するときいづれが優越的であるかを考えて見るのも興味がある。プロレタリアートが客観的には全人類の実践の指導者たり組織者たるの使命を担っていることは弁証法的理論の闡明するところである。然し現在政治的に見てブルジョアジーの実践的力とプロレタリアートの実践的力とが或程度まで均衡的に対立しているとしても、全体的に見てプロレタリア的党派は、ブルジョアジーの展開した諸実践の成果を抜くだけの実践を發展せしめ得ていないのだ。ソヴェート・ロシアのプロレタリアートが悩まされている悪夢は、資本主義社会が駆使している技術を如何にしてプロレタリアートの手で駆使するかの問題である。プロレタリア的党派にとっては、実際にブルジョアジーの実践に優越することが問題なのだ。自己党派の優越的意義を發揮することが問題なのだ。優越的意義は理論がこれを闡明したのだ。優越的意義が先ずあってそれに従ってプロレタリア的党派の理論に優越性が附与されたのではない。ブルジョアジーの実践は萎縮する実践であるに反し、プロレタリアートの実践は伸展する実践であるとは、理論的に言われたことであり可能性に於て言われたことである。現実性に於ては、實際上に於ては、プロレタリアートの実践は自然成長的に伸展して他の階級党派の実践に優越するが如きことはないのだ。プロレタリアの実践は自然成長的な形に於ては、ブルジョアジーによって支配される実践である。優越の可能性を現実的な優越に導くものは、客観的、弁証法的理論、党派性に累わされない理論の任務である。即ち科学的社会主義理論の任務であり、この理論の指示を實際に移すべき前衛的自覚的分子（共産主義者）の任務である。

最後に既述のことからして、普通考えられている誤解、即ち弁証法的唯物論と科学的社会主義の理論とは、プロレタリア階級の実践を通じてのみ始めて形成され得たのだという誤解を、一掃することができる、レーニンは何れもマルクス以後に於けるプロレタリアートの実践はマルクスの科学的社会主義理論の正しさを充分に証明した（謂わば検証した）と述べたが嘗てマルクス主義がプロレタリアートの実践を通じて生れたとは一度も述べなかつた。寧

るプロレタリアートの実践と独立に発展した理論に基いて生れて来たことをこそ指示した（彼の「何を為すべきか」を見よ）。弁証法的唯物論は如何いかに。この世界観は寧ろ有産者階級が近世に於て広大に展開した実践の経験に基いて生れたと言つて過言ではない。ドイツ弁証法哲学特にヘーゲルの体系は、人類の總実践の経験の綜合であり、同時にギリシャ以来の二千五百年の科学と哲学との発展の正統的繼承である。マルクスの弁証法的唯物論はこの背景をもつたヘーゲル哲学から生れた、即ちヘーゲルの理論を資本主義の展開したより以上の実践　産業的、商業的、科学研究の、社会的政治的実践　の経験に基いて検証し、自然及び歴史の弁証法的法則のより深い理解を獲得することによつて生れた。マルクスの唯物論にとつてはプロレタリアートも亦ブルジョアジーの実践の必然的所産であつた。そしてブルジョアジーとプロレタリアートとの対立を生み出す根元、即ちブルジョアの生産關係を分析した。プロレタリアートの歴史的使命はこのことによつて発見されたのだ。プロレタリアートは理論によつて明かにされたのであつて、プロレタリアートが理論を明かにしたのではない。科学的社会主義の理論は、マルクスが定式した根本見解を理論的前提とし、資本主義の、その後の発展の諸経験を包括し乍ら発展するのであつて、この理論にとつては、プロレタリアートの闘争は自己の理論の中に包括すべき一つの要素、全体的な歴史の認識の一つの部分理論によつて認識さるべき一対象たるに過ぎないのである。この理論は諸階級の相互關係の認識の下にプロレタリア階級のその時々にとるべき立場を規定する。

党派性イデオロギーにとつては、プロレタリア階級党派の実践、その党派のその時々々の立場が絶対的前提である。理論はこの実践、この立場に規定されて形成されるものであると。眞実の科学的共産主義の理論は如何いかに、その実践的前提は人類の経験的実践の總体であり、理論的前提は、この人類の總実践の経験の理性的弁証法的總括、即ち二千五百年の歴史を有する哲学及び科学の発展の成果としての弁証法的唯物論である。党派性イデオロギーにとつては、プロレタリアートの実践は、理論を規定し指導するもの、理論は自然發展的实践に追隨し、それに規定される

ものである。党派性イデオロギーは、実践を歴史の弁証法的法則に従って、合目的に指導する条件を持っていない。従つてこのイデオロギーの立場からは、実践はそれ自身の盲目的必然性に従つて発展するものとならざるを得ないのであつてその問題はただ、実践のその時々の様相や方向に意識を、従つてまた意識的行動を、適応させて行くことに尽きる。真正の理論は、その理論的、実践的前提に従つてプロレタリアートの実践を把握し、その実践の條件に従つてそれを指導する。

党派性イデオロギーにとつては、実践のプロレタリア階級党派の実践の諸側面に順応する意識が問題なのだ。

真正の理論にとつては、歴史の客観的な弁証法的発展法則を把握するのが問題なのだ。それに従つて階級の実践を把握しそして目的意識的に、即ちその階級が歴史によつて担わされている客観的な使命の実現の方向に合致するように、指導することが問題なのだ。

## 二 党派性イデオロギーの哲学的科学的研究に於ける影響

理論の党派性、階級性に関する党派性イデオロギーの主張が如何に難点を含むにしても、それは大正十五年以来明確な形態に定式されて左翼的革命的な思想を排他的に支配し來つたものである。最初に党派性イデオロギーを体系だつた形で吾々の間に提出したものは福本和夫であつて、彼の理論は同時に党派、即ち党そのものの建設理論であつた。そしてこの方面に於て福本イズムは幾度か批判されたが党派性イデオロギーとしてその根本的立脚地は批判されるに到らなかつたのみか、寧ろ益々極端化されて党のイデオロギーを支配したのである。階級的革命的実践闘争に於けるこのイデオロギーの影響は次節で述べるとして、ここでは科学的、理論的研究に於ける影響に触れよう。

この点に関しては、福本イズム以後プロレタリア科学研究所の二つの傾向（最初に三木清、次に哲学テーゼの思想、後者は一度は昭和五年八月号、いま一度は昭和八年九月号の「プロレタリア科学」誌に発表された）、或は唯



物論研究会の主導的幹部例えば戸坂潤、三枝博音、船山信一、永田広志等の諸氏によって種々な形態で説明され主張されたが、その根本に於ては、福本イズムの思想に格別新たな要素を付け加えるものではなかった。

福本イズムの理論的哲学的方面は彼の留学地たるドイツに於て、当時新説をもつて述べられていたゲオルク・ルカッチの階級意識論の請売たるに過ぎない。ルカッチは西欧の講壇哲学たる新カント学派の思想的影響の下に、彼の階級意識論を提唱しマルクス主義に全く新たな解釈を与え、その理論的立脚地に新回転を与えた。即ちマルクス主義の基礎たる弁証法的唯物論は、エンゲルスやレーニンの説明した如く、自然並びに歴史の現実的な相互関係を先入觀念なしにありのままに把握した成果に外ならぬもの、それ以上の意味を持たないもの、というが如き性質のものではなく、元来プロレタリアートの階級意識として、その階級の闘争の意識として形成されたものであるとの説をなしたのである。ルカッチは、更にこの発見に従つて、次の如く論じた。即ち党派性階級性を担う意識特にプロレタリアートの実践との統一に於てその過程に形成される意識は資本主義社会に対する批判と社会主義的闘争意識としての共産主義理論の範囲に限るのであつて、マルクス主義は厳密に自己をその範囲に限定することによつて自己の革命性と党派性とを維持しているのだ。従つてマルクス主義を、またその本質たるマルクスの唯物弁証法を、自然科学や従来歴史の客観的な研究の分野にまで拡大することは出来ない。というのは、これらの科学研究は、プロレタリアの党派実践との統一に於て形成されるという性質を持たないからであつて、マルクス主義理論を（エンゲルスが為した如く）、自然や歴史の全分野の体系的研究に拡大することは、その革命性と党派性を抹殺して、それを何か客観的な、純粹学術的なものに還元することを意味する、と。

然し乍ら、福本イズム以下の党派性イデオロギーは、ルカッチの置いた制限を無視して進んだ、そしてプロレタリア階級の実践に適應して生れる階級意識と対応して、それと統一的な聯関にある世界観（自然及び歴史社会に關する）を仕上げるという方向へ發展した。このことによつて党派性イデオロギーは、理論研究の中に流入した。当

時マルクス主義哲学の正統派と考えられていた、デボーリン派の見解、ルカッチの反対極をなしていたデボーリン派の見解が、結局この点で党派性イデオロギーと一致するものだと言えは驚く人もあるかも知れないが事実なのである。福本和夫はその個人雑誌「マルキシズムの旗の下に」に「デボーリンの最も特徴的な論文を連載したが、その中でデボーリンはマルクス主義を三つの構成部分に分解し、一般的方法としての唯物弁証法、それによる自然研究としての自然弁証法、同じく歴史研究としての歴史弁証法を指示し、唯物弁証法の一般的方法に従って、自然及び歴史の発展法則を研究し、マルクス主義の理論的体系的完成を知らねばならぬと唱道した。デボーリンは別の論文、例えば「戦闘的唯物論者レーニン」の中で一般的な唯物弁証法の方法は全くプロレタリアートな実践的階級党派の性質に適合したものであると述べている。デボーリンの誤謬は、唯物弁証法の方法を自然及び歴史の運動形式を抽象した発展図式のようなものと考えた点にある。然し自然及び歴史は決して抽象的な図式に従って理解出来るものではない。自然及び歴史のあらゆる領域には夫々特殊な法則が行われているのであって、それを認識することこそが大切なのだ。自然及び歴史がその運動に於て、一般的弁証法的図式に従っていることが指摘されてもそれはその運動の具体的な認識にはならない。真の科学的方法なるものは対象の感覺的印象の直観的受容から如何にしてその対象の弁証法的な理性的な全面的な認識に到達するかということ、即ち、認識の発展条件、科学的理論の形成条件、換言すれば理論的思惟の法則を示すものでなければならぬ。要するにその法則に従って思惟を正しく行使することにより、対象の余蘊なき認識を取得する方途を示すものでなければならない（五頁 七頁〔4 6頁〕参照）。デボーリン派は現在ソヴェートに於てミーチン一派によって克服されたが、デボーリンのこの根本的な誤解に就ては未だ意識されていない。実はミーチン一派はデボーリンの抽象主義図式的論理主義を党派性イデオロギーの立場から批判し、その立場を徹底させんとするものに外ならないのであって、この哲学派の見解は最新の新進論者（船山山岸等）の所論に反映している。

プロレタリアートの実践の夫々の発展段階に適應して生れるその時々<sup>それぞれ</sup>の党派的闘争意識と対応し、それと統一的な聯関にある世界觀を展開するといふ党派性イデオロギーの理論研究的課題に就て、戸坂潤が全く特徴的な意見を吐いている。

例えば生物の種は神が創造したといふ理論と、太陽系が神によつて運動を始めたといふ理論と人類は神によつて創造され、神の意思によつて運命づけられているといふ理論と、この三つの理論は相互に割り切れる關係にある。然るに神が天体や生物の種を創造したのであつて、この神の手が変化を持ち込まない限り、天体も生物の種も進化せず永久不変であるといふ理論と、人間の歴史は、歴史自身の物質的な原因で進化するといふ理論とは割り切れるか、否、割り切れない。だが天体や生物の種は、自身の物質的條件によつて、それ自身の相互作用を通じて変化生成するといふ理論と、歴史の発展の唯物論的な理論とは割り切れる關係にある。割り切れる關係とは何か。20と15とは5といふ公約数でもつて割り切れる。然るに35と18の間には割り切れる關係（数学上の術語では、共軛的關係）がない即ち公約数はない。これと同様な筆法で、自然や歴史や社会等の諸理論が相互に割り切れる關係に立つとはどういふ意味か。それらの間に謂わば公約数に當るようなものが含まれていることを意味する。それは科学の方法である。例えば右の例で言えば割り切れる關係にある諸理論は、夫々、神による世界の形而上学的説明方法といふ「公約数」或は世界をそれ自身の物質的原因によつて発展し変化するものとして説明する方法といふ「公約数」が内在していることに依るのである。戸坂潤は凡そこつ言つたような意味のことを「唯物論研究」誌第一号所載「社会に於ける自然科学の役割」の中で説明した。

戸坂潤は偶々プロレタリアートの階級闘争意識と割り切れる關係にある諸理論を科学のあらゆる領域に確立するといふ党派性イデオロギーの理論的課題の基礎を言い表わしたものである。党派性イデオロギーは理論の形成と発展とに就て次の様な一般的な考え方を持っている。即ち先ずプロレタリアートの実践的立場に対応して一定の認識方法が形成される。つまりこの認識方法は最初階級の闘争の意識特に社会主義的階級意識の中に内包された形で現

われ、この意識の中で特に鮮明に特徴づけられ、この認識方法が理論的に分析され取り上げられ（唯物弁証法）、科学の各方面に浸透せしめられ、それによって、プロレタリアートの世界観（自然及び社会歴史観）が形成される。この世界観の確立は従って理論の領域に於て行われる階級闘争だという風に理解されるに到った。また党派性イデオロギーの立場からは、階級性党派性の程度に従って諸科学に順位が設けられる。即ち諸科学に於ける優位は社会科学就中資本主義の革命的変革の理論である。

これを福本和夫の所論に就て見よう（彼の「社会の権成並に変革の過程」、「経済学批判の方法論」等を見よ）。プロレタリアートは資本主義社会の一階級であり、自己の階級利益を貫徹することによって階級利益一般を止揚し、社会主義の下に人類解放を遂行すべき立場にあるもの、即ち資本主義社会の全体的批判者の立場にあるものである。従ってプロレタリアートの立場に立つものは、社会認識に於て一定の認識方法を持たざるを得ない必然にある。即ち彼は（一）事物を変革的生成に於て見なければならぬし、見ることが出来る。（二）事物を媒介性に於て見なければならぬし、見ることが出来る。（三）事物を全体性に於て見得るし、見なければならぬ。（四）彼の党派の立場からの認識は同時に社会の客観的な認識となる性質を持っている。この認識方法が福本イズムに於けるかの有名なまた恐るべき唯物弁証法であったのだ。

（註）

右の命題に俗解りな説明を加えるなら、（一）は問題ないとして、（二）は事物の表面的な推移を直観するに止らず、何が事物の変革的生成の枢軸となっているかを分析的に明かにすること、（三）は片面的、部分的でなく全体的に見透すこと。プロレタリアートは恰度の現状の変化を欲し、変化の枢軸たる地位にあり、この枢軸たる立場から見るから全体的に見ることが出来る。従って（四）は自分が何であるかを知ることによってプロレタリアートは社会を客観的に見ることが出来る。というような意味である。

これを三木清の所論に就て見よう（彼の「唯物史観と現代の意識」「社会科学の予備概念」その他を見よ。）プロレタリアートは実践的階級である。従つて対象を感性的に即ち肉体的力を以て変化せしめる。概念論者、即ち対象の本質が主観の觀念の中にあると考えるものは、対象世界の变革を觀念の中で成し遂げる（即ち世界の意味の解釈に終止する）に反し対象を感性的に变革する（産業的实践や政治的革命等）者は必然に対象を外部的存在と考える、即ち唯物論者となる、と。弁証法に就ては如何。実践的に対象と交渉するプロレタリアートは、觀念論者の如く対象の觀念的本質の分析によつて対象を占有するというのが如き觀念の遊戯とは關係がない。プロレタリアートは現実世界の聯関の一環を捉え、これを克服し、それに基いて次の環を克服するという仕方、過程的な即ち弁証法的な仕方でもつて現実世界を逐次に占有する。従つて実践にある限り人は弁証法的に対象を把握する、即ち彼は弁証法論者となる。

以上福本、三木、戸坂氏等の所論を一貫しているものは外ならぬ、ルカッチ或はデボーリン流の図式主義である。これらの所論に於ては、唯物弁証法なるものは、党派の主観に規定された思考方法として理解されている。即ち、この党派の立場にある限りは、あらゆる対象に対して一定の視角をもつて臨むこと、その視角に従つて事物の認識が異つて来ることを前提としているものである。ルカッチ型とこの傾向を呼ぶならば、いま一つの傾向をデボーリン型と言えよう。それは特に戸坂潤の傾向（少くとも彼の従来、の傾向）に明かにあらわれていることであるが、唯物弁証法が党派の立場に規定された視角であるという意義が背後に没し、自然及び歴史の何れの部分、いずれの領域、いずれの運動にも当て嵌まる一般法則、という風に理解されている。そしてかかる唯物弁証法が革命的プロレタリアートの精神に合致すると考える点に於て戸坂氏もデボーリンも、ルカッチ型の考え方を背景に持っているのだ。いずれにもせよ真正の認識、真正の理論は対象を一定の視角から規定し、この視角から見た場合の姿を反映するものではない。また対象を一定の図式の尺度に照らし合せ、この図式に対応する限りの姿を反映するものでも

ない。エンゲルスは真正の理論即ち弁証法的唯物論的認識は、現実の自然や歴史を何等の先入観なく、それ自身のありのままの聯関に従つて把捉した成果に外ならぬと述べて居る（「フォイエルバツ八論」第四節。）思惟が対象の感覚的印象を直觀的に受けとつてから、対象の聯関、対象の法則のありのままの把捉に到るまでの思惟の手續は前述の通りである（五頁 七頁―4 6頁）参照）。眞の認識は、この思惟の手續の中に於て、特殊の視角、特殊な尺度が振り落され、思惟が対象のありのままの法則それ自身の聯関、対象の弁証法的展開に即した見方（理性的な視角）に立つ場合にのみ得られるのだ。対象をありのままに見る視角というものがありとすれば、それは認識するものの側に対象と独立な原因（例えば階級的党派的立場）から附与されているものではなく、その対象の運動の法則に規定され、その対象のそれぞれの具体性に適合した見方として、その対象の内的相互關係の研究の中から（思惟の前述の手續によつて）鍛え上げられて来たものでなければならぬ。対象を眞に認識すべき視角は、認識主觀の背後にある党派的立場や認識主觀に於ける先入的図式に即するものではなくそれぞれの認識対象の客觀的發展法則に即してそれぞれに取られなければならぬ。

福本和夫の唯物弁証法は、対象を生成、媒介性、全体性に於て見ることを規定しているが対象をかかる風に見る仕方は対象の研究、即ち直觀や分析や綜合や檢証の過程の結果として生れてくるのであつて、この過程と独立に、対象に直觀的に臨むときから既に前提的に与えられているものではない。かく見なければならぬということ、かく見得ることとは別個の事柄である。如何なる立場から、視角から、前提から対象に臨もうとも、研究の過程が認識の法則に従つて正しく進められる限りは、その対象の媒介性、全体性、生成に於ける把捉に到達するのだ。これと反対にそれが正しく進められない限りは、媒介性、全体性、生成に於て見ようと意圖してもその意圖は実現しない。社会の發展の客觀的法則の媒介的全体の生成的認識も研究の結果得られるのであつて、プロレタリア的立場からかかる認識の條件が与えられるのではない。三木清に就ても同じことが言える。唯物論とは実践的立場に即して対象

を外的感覺的存在と見る見方ではない。吾人の目に映ずる対象の姿がそのままでは、どの程度に客觀性をもつものか、どの程度に主觀の偏見に累たがわされているものかは分らない。対象を分析し、研究して見ることよって始めて主觀の規定と独立な、客觀的法則を把握し得るのだ。唯物論とはこの把握の成果である。三木清の考え方からすれば、対象に附与された主觀的想定までがそのまま外的対象のそれ自体の規定として受けとられることになる（彼はちなみに、主觀の規定の下に救い上げられた対象のみを、対象と考え、一切の主觀の規定から独立した、客觀的存在は認識する価値がないと考えている）。対象を外的感覺的存在と見ること、外的対象的存在を研究し、その法則の唯物論的な認識を取得することは別個の事柄である。唯物論的認識を取得するか否かはその研究の進め方に依存しているのであつて、対象に対する見方に依存するのではない。

党派性イデオロギーの理解する理解は、悟性的段階に於ける理論に外ならぬことを前述したが、悟性は、対象の個々の規定を個々に理解する能力である。従つて個々の規定の相互關係に關しては、認識が及ばない。認識の及ばない結果客觀的な相互關係の法則に即してではなく、主觀の考え方、見方、視角、図式に即して、相互關係を想定するといふ立場に立たざるを得ない。そしてこの視角や一般法則の図式が「公約数」となつて、相互に割り切れるプロレタリア諸科学の体系が生れるのだ。党派性イデオロギーのこの体系と真正の科学との間には、だが割り切れる關係はない。というのは真正の科学的理論、科学的認識は思惟が対象の研究の過程に於て悟性的段階から理性的段階に高まり、党派的立場や主觀的視角の図式を払い落し、対象のそれ自身の、現實的聯繫を把握することによつて得られるのだがこの不可欠的條件は、党派性イデオロギーの中には含まれていないからだ。

党派性イデオロギーの最近の形態では、図式主義（一般的視角や一般的運動形式としての「唯物弁証法も」の思想が背後に押しやられ、一般的方法としての唯物弁証法を科学のあらゆる領域に浸透せしめる課題は既定のこととして、且あまりに抽象的なこととして問題の外に置かれ、理論研究に於ける党派性が一層強調されている。これは

一面ソヴエート聯邦に於ける、デボーリン派の没落と対応し、又他面では、福本イズムやプロレタリア科学研究所の左翼派によつて意識されていた思想の精製という形で現われた。この形態のものとしては、船山信一、山岸辰蔵、永田広志等を挙げる事が出来よう。プロレタリア科学同盟の哲学研究委員会テーゼもこの傾向を追うものである。最新の傾向の特徴を簡単に述べるなら、理論は実践に規定され、指導され、適応して行かねばならぬ。これが理論の発展の鉄則である。理論的方法、認識の視角が党派的であるのみでは足りない。弁証法的研究を単に書齋的、学問遊戯的に進め実践から遊離する傾向に趨つてはならぬ。即ち、研究される内容、科学の題目に於ても、党派的でなければならぬ。研究の方法のみならず、研究の対象も亦階級党派の課題に依つて決定されなければならぬ。理論が階級実践に規定されるとすれば、其れにより一層高度の意味に於て、理論は意識的に党（階級実践の指導層階級の頭部）に従属し、党的課題に全面的に適応しなければならぬ。党は同時に理論研究の指導者でもある。一方では理論の方法の党派性が高められねばならぬ。（デボーリン派は唯物弁証法の方法とスピノザ哲学或はフォイエルバツハ哲学の方法とを同一視し、更にヘーゲルの觀念弁証法との區別を抹殺し、レーニンの哲学を無視してブレハノフの誤謬を復活させた云々というミーチン派の批判を参照。これに従つて「認識論としての（唯物）弁証法」というレーニンの標語が採用され、吾国にも輸入された。レーニンが弁証法とは結局認識の法則だと述べたのは、彼が弁証法の下に真正の科学的理論の形成法則（五頁 七頁〔4 6頁〕参照）を考えていたことを示すのだが、これは未だソヴエートに於ても吾国に於ても発見されていない。他方では、方法が具体的知識と分離する傾向を克服し、特に党的課題に即して、研究対象を決定し、その具体的知識と方法を結合し、科学的内容の党派性を高めねばならぬ、と。（方法は一般的視角或は図式と考えられ、対象の研究と独立に論じ得たため哲学は常に具体的知識と分離して居たのだ。然し乍ら<sup>しか</sup>真<sup>なが</sup>の方法は対象の全面的な具体的な知識を取得せしめるための方法でなければならぬ。ミーチン一派も、吾が国のその悪流も、このことを意味せず、科学の方法に関して依然旧来の考え方を



もっている結果、抽象的図式的方法と具体的知識という二つの別個のものを結合するという標語が生れたのだ。

以上党派性イデオロギーの諸例を批判的に紹介したが、最後に私自身の対立的主張を纏めて置こう。

一、先ず科学は階級性によって分類できない。科学は歴史的に登場したあらゆる文明民族、あらゆる階級の科学的研究家の協力の下に蓄積され発展せしめられ行くものである。それは人類の共有財産であり、いずれの階級、いずれの党派にも分属せしめらるべきものではない。科学の流れは、個の流れであり、この流れを豊にし、この流れをより広い広野に導くことが吾々の任務である。科学の流れはそれぞれの階級的立場を水源とする、幾條もの流れではない。

二、それぞれの党派はこの科学の流れの中から、自己の必要に即して諸理論を汲み取るのであって、この流れと別個に、党派の課題に適合せしめて諸々の理論を形成することは出来ない。寧ろ逆に党派こそ、自己の課題が何であるかの認識を、この科学の結果に基いて明かにしなければならないのだ。党派が理論の指導者ではなく、理論が党派の指導者である。また党派性イデオロギーは、プロレタリアートの党派の課題に適応しつつ、ブルジョアジーの党派の課題に適応した諸理論と闘争することによってのみ、真の科学的理論は、樹立されると考え、科学に於ける階級闘争（二十一頁（19頁）参照）を信ずるが、真正の認識ならぬ作爲的欺似的理論の克服は、階級闘争の原理によらない。この克服は認識の法則（前記五頁 七頁（4 6頁））に従い思惟を首尾一貫的に行行使し（真正の科学的理論の形成過程に照らして作爲的欺似的要素の入り込んだ道程を探り、これを除去し）、客観的な真正の認識に到達する過程に於て行われるのだ。誤れる理論は、この認識の法則、科学的理論の形成過程を最後まで（即ち対象の弁証法の理性的認識にまで辿らず、思惟がその中途でとどまるか、或はこの過程の中へ介在的要素を持ち込む場合に生れるものだからである。階級的、党派の立場なるものも要するにかかると介在的要素の一つに外ならない。

三、党派の立場に累わされない客観的な認識を取得し、人類の科学の共有財産を豊富にする一切の科学研究は党

派にとつても亦有意義なのだ。何故なら、自然及び社会の支配の課題、国民の経済及び政治の指導を引受け得る党派のみが人類社会の指導党たるのであつて、プロレタリア的党派も自己の覇権を確立しようとするれば自然及び社会に関するあらゆる偏見なき研究の価値を評価しなければならぬ。その上認識、一般に科学的理論は総合的に發展するのであつて、他領域における理論の均衡的發展がなければ、プロレタリアートに直接必要な理論の領域が適応的に開拓されることはない。(科学的諸理論は、理論的思惟の弁証法的な發展法則に依つて相互に内的に關係し合つていたのであつて、民族的、社会的、歴史的、階級的、党派の必要の推移に従つて諸理論の体系的序列が与えられるのではない。)

\* \* \* \* \*

論すべき問題は、尽きない。以上は理論的研究の分野に於ける党派性イデオロギーの諸問題の単に二、三を述べたに過ぎず、自然科学、哲学、宗教学、芸術論、一般文化論、経済学、法学、政治学、史学等の個々の領域に於ける党派性イデオロギーの問題に就ては、ここに一切を割愛する外ない。

### 三 党派性イデオロギーの階級的党派的实践に於ける影響

第一節の最後に述べた如く、党派性イデオロギーにとつては、党派的实践は他党派との対立抗争を通じて、自生的に發展する原始的前提であつて、理論は自己自身の前提と法則とを以て党派的实践の意義及び條件を把握しこれを指導するものではなく、ただその党派の实践の個々の側面に適應すべき意識たるに過ぎない。

革命的理論なくして革命的行動なし(レーニン「何を為すべきか」)。革命的行動の实践は党派性イデオロギーにとつては、理論の指導を必要とせざる既定の与件として考えられているもの如くである。従つて、問題はこの原

始的事実としての革命的実践に（実践の諸側面に）それぞれ意識を適合させ、自己の行動をその意識に従って、その実践のそれぞれの側面に順応させて行くことに尽きる。

党派性イデオロギーは、理論をば、自然成長的な階級的、社会的諸勢力を合目的に即歴史の変革の法則の認識に従って指導するものと考えない。党派性イデオロギーは、理論をば、自己発展的な社会的階級の実践のそれぞれの段階、それぞれの側面に適応してゆくための意識、それらに適応して党派的な結合を実現するための共通意識、或は旗印として理解しているものの如くである。党派性イデオロギーは、その際、この意識が、果して真に歴史の変革の法則に適合しているか否かということはこの法則の全面的認識に照らして吟味するということをしなない。党派性イデオロギーは寧ろこの法則の全面的な理論的認識の可能性を否定しすらする。実践の発展の基礎なくして、単なる理論的分析のみからして、この実践の全面的な意義や條件の把握をなすことは出来ない。その意味はこうである。即ち一つの意識が実践に真に適合しているか否かは、批判的に予断できぬ。それはその意識の立場から実践して見て検する外はない。その結果その意識が誤謬であったとしても、それは実践を進め、より高まった実践の立場に於て言えることであつて、先の実践段階に於ては、その意識も正しいものであり、必然のものであつたのだ。つまりその段階に規定されたものであつて、その段階では、それ以上のものは生れ得ないのだ、ただ実践のみが理論を深める。云々。

エンゲルスは革命的理論（科学的社会主義）に就て次のように述べた　社会主義は科学となつた、と。だから科学なりに、研究されねばならぬ。それは社会的、歴史的現実の分析の中から実践の前提を闡明し、その実践の意義及び條件を把握するもので、実践の発展と相対的に独立せるものである。党派性イデオロギーは実践の発展面に折り合わされる意識として理論を解するが本来の理論は、実践の意義と条件に従つてその実践の発展を明かにする。実践の発展が理論を明かにするのではない。

斯上の認識に従って、党派性イデオロギーの階級的実践的方面への影響を論じて行きたいが、それは結局吾が国（のみならず諸外国、及び国際）左翼運動の批判的歴史を書くのに外ならない。これはここでは不可能のことである。以下単に二、三の点に触れるにとどめよう。

党派性イデオロギーの第一の形態たる福本イズムは元来党建設理論として唱道されたものなることを言った。党派結合のためには、党派的意思を要する。即ち、かかるものとしての「唯物弁証法」の体得を要する。福本イズムはこの「唯物弁証法」を領得せる学生その他のインテリゲンチヤ分子を結合して、階級的闘争の実践に意識的に働きかけるところの党派の建設を企図した。福本イズムは、レーニンの所謂「理論は実践の外から」という思想を党派性イデオロギーの上に折衷したのだ。然るに、レーニンは、理論は実践段階に規定されつつ発展するのでなく、科学的諸理論に基く実践の條件の認識であり、実践を指導するものと言う意味で、実践の外から実践の中へ持ち込まれると規定したのだ。福本和夫は真実の理論の意義を評価せず、「理論は外から」という命題を、抬頭しつつある無産政党運動の実践に関心を持ち始めた社会科学研究生や政治インテリゲンチヤを實踐の中に輸入するという意味に理解した。そして真正の理論の代りに、これらの分子とともに実践の中に持ち込まれたものは、私の屢々繰り返した党派性イデオロギー的意識であった。（面白いことに、レーニンは、党派性的イデオロギー実践のあれこれの特徴に規定される意識は、実践の中から生れるという考えであった！）

真正の党派性イデオロギーの立場よりすれば理論は実践に規定され、実践の中から、実践とともに発展すると考えるべきが至当なのである。福本イズム折衷主義は、この点で最も批判を蒙ることになった。福本イズムの批判は次のように行われた。福本イズムは、より発展した闘争の実践とそれに対応するより発展した意識とが、コミンテルンに於て統一されているにも拘らず、このコミンテルンによる指導ということを忘れて、机上で社会主義を勉強した「批判的に思考する個人」、即ち、学生その他のインテリゲンチヤを結集して党を建設しようとしたが、こ

これは我国の闘争を孤立的に導こうとするもので、一国主体建設論として有害なイデオロギーだ、と。これが以後党の指導的な考え方となっている。

福本イズムの誤謬は一国主体結成論たる点にあつたのではなく、彼の党建設論が何等本来の実践的理論的基礎を持たなかつた点にあつたのだ。福本イズムの党建設論が、急進的學生及びインテリゲンチヤと彼等の党派的イデオロギーとを理論的現実的前提としていたとすれば、その批判者はコミンテルンの指導を党建設の前提と考へた。然し乍ら<sup>なが</sup>一国主体建設論それ自身が誤っているのではない。コミンテルンは国際指導部であり、一国の指導のためには必ず一国的指導部の確立を必要とするのだ、一国指導部はその国の固有の諸條件に従つて活動しなければならぬ。一国指導部建設の実践的前提はその国の労働者及び農民その他の革命的な社会勢力の動きであり、理論的前提にはその国の労働者及び勤労民衆の運動の中から形成され、その国の社会的、人的條件に適合していなければならぬし、理論的には社会的變動のあらゆる徴候を看取し、それから党派的戦術、社会主義的政治的結論を引き出す能力をもっていなければならない。この実践的、理論的な條件が一国に於て發揮され、蓄積され、伝統的精神となる場合にのみ、眞の強力な一国指導部は実現する。強固な一国指導部がなければ、コミンテルンの指導自身が無意味となる。単に意図のみを以て国際指導を実現することは出来ない、一国の指導はコミンテルンに依存するよりも寧ろ一国指導部それ自身の指導能力に依存する。コミンテルンの指導は一国的運動の独自の指導の基礎の上のみ咀嚼することが出来るのだ。この独自の指導の能力なき未成熟な党のみが国際指導を絶対化しそれに機械的に従属し、一国的指導を誤るのだ。

党の建設と発展に対する実践的理論的條件は促進せしめられ蓄積され、党の伝統の中に保存されなければならぬ。このことは弾圧の下にあつても不可能ではないのだ。従来党派性イデオロギーの影響の下にこれが意識されなかつ

ただけである。党の中に理論的伝統が生れるならば、事情は非常に改善されて来るだろう。党派性イデオロギーが理論を遮断した結果として、吾々の間では、経験は綜合されず、一般化されず、社会的徴候は看取されず、評価されず、戦術や方針、更らに戦略すらが、屢々変更された。変らざる方針の下に終始一貫して実践を發展させることの必要を解してもそういう方針を立てるだけの能力がなかった。立てる方針方針がたとえ一応の理屈は持っているとしても、実際に移して見ると何か知らずボロが出、思わぬ結果の生ずることが屢々である。実践はかかる方針には指導されず、それ自身で無意識的に、その場その場の事情に押されて消長するだけであった。党派性イデオロギーは此のことから理論的伝統の形成の必要、理論的水準を高める必要を意識することなく却つて逆に一貫的方针は最初から確立することは出来ないとしてこの必要を無視し、実践、それが理論的意識を押し進める唯一の基礎だと主張する。吾々の方針はそれが誤っていたとしても、その当時は正しかったのだ。そして実践が發展することによって、その誤謬や一面性が分つて来たのだ。その当時その方針の誤謬を云々するものがあつたとしても、それは実践に移される條件を持っていないものであつたのだ。実践を通じた結果として指摘するのではない限り、誤謬を云々する権利はないのだ、と。最後に日本問題に関するコミンテルン西欧ビューローテーゼに附した日本共産党中央委員会の序文には、戦略の変更<sup>ついで</sup>に就て、全くこの精神から、この変更は、吾々の実践の發展によつて、もたらされたのであつて、机上から生れたのではないということが特に強調されている。然しながら、従来の方針の変転は、実践の發展に應じて、理論がそれに適応して行つたことを意味するのではなく、実践の發展に適応して指導力を發揮するだけの理論がなかつたことを意味するのであつて、このために実践は合目的に指導されず、実践のその時々<sup>の</sup>事情の一方的な理解が指導理論に代位した結果である。

眞の革命的理論なくして、ただ党派性的イデオロギーから導かれる実践は、正しく指導されない、盲目的に發展する実践であり、党派自身は、その方針の破綻と変転によつて実践から遊離する党派である。大衆の実践から遊

離し、大衆の中に自己の確固たる政策を宣伝し、煽動し、大衆を納得せしめ、大衆を組織することの出来ない党派、それは陰謀団に外ならぬ党派であり、かかるものとして自壊する党派である（そして、もしかかる党派が「外から」学生その他のインテリゲンチヤ分子の輸入によって補充されるか、或は「外から」コミンテルンの指令によって衝戟を与えられるかして、其の党派的存在を続け得るとすれば、これは正しく党派性イデオロギーの希望通りである！）

階級闘争の實踐の領域に於ける党派性イデオロギーを要約すれば、

一、實踐の一定の段階に規定された意識があり之を党派的自覚として即ち党派結合のための共通意識として一定のグループが形成される。

二、この集團は、対立集團との闘争を通じて、この共通意識分有者の範圍を拡大し、同時に党派的自覚の程度を高める。

三、一切の社会的要素はこの党派意識の立場から評価され、この立場に適合する方面のみが許容され、そうでない方面は排撃され、かくして一切の社会的（經濟、文化、政治的）要素がこの党派意識を分岐点として二分され、対立せしめられ、その一方を党派の中へ包含するという仕方<sup>で</sup>党派の勢力と結合を拡大する。

党派性イデオロギーに基く實踐のこの公式に批判を加うれば

一、党派の意識は、現制度に対する不満と反抗とを代表し、反逆の熱意と決意と實踐とに於て最も前進的であり、徹底的であるとの自覚に還元さるべきものでもなければまた實踐の中に参加して行くための、或は實踐の諸側面に順応して行くための共通意識といったようなものでもない。党派の意識は大衆の不满と反抗との実践的行為を合目的に規制すべきその方面の意識即ち大衆の闘争の指導理論でなければならぬ。それは現前の社会的關係の歴史的発展法則、現前の社会的階級關係の客觀的、理論的認識に基くものでなければならぬ。この認識に基いて闡明<sup>せむい</sup>され

た、プロレタリアート階級の前進のための条件と、方途の意識、これが党派の本来の意識である。党派の意識の深化と発展とは、この認識の深化と発展とに依存するのであつて、対立党派との闘争の激烈さに依存するのではない。二、党派が自己階級及び他の社会諸層に対して採るべき立場は、それらとの相互関係の客観的認識に基かねばならぬ。社会的諸要素、諸集団は、それ自身の存立条件と発展法則とを持つもので、それらは夫々それぞれ自身として認識され、評価されねばならない。特定党派が社会諸要素から支持を受け、それと協力し、その中に自己の党派の勢力を拡大できるのは、それを諸要素の最も合目的な効果ある発展を支援し、保証することが出来る程度に应じてである。党派の利害、党派的目的のために、他の社会的要素の独自の利害、独自の発展を無視することは、逆にその党派がそれを諸要素から反撃を受ける結果を招く。

(附記)

階級実践の個々の領域に亘つて論ずる準備はここには無い。念のため右に触れた諸点に關聯して、二、三の実例を指摘して置こう。党が思想的統一に就て無関心であつたことは、党が理論機關誌の問題を解決出来なかつた点にも現われている。党の思想的統一は従つて自然成長的な党派意識、吾党意識によつて、或は又コミンテルンテーゼの機械的な暗誦によつて保たれて居たといつて過言ではない。かかる党派性イデオロギーの結果として、理論が自生的運動を合目的統一的に導かないで、逆に自生的運動に理論が追隨する結果になり、党的統一が自生的運動の不統一によつて破られるという風な結果になつた。旧資金局や旧軍事部等が党内党を作つたのは単にその著しい現れたるに過ぎぬ。

自己の党内の統一が破れる傾向と表裏して、党的統制を党外団体にまで及ぼす傾向もまた党派性イデオロギーにとっては必然の事柄である。即ち党は党外諸団体の独自の条件と法則、党外大衆組織としての特性を認識しその活



動を夫れ夫れに發展せしめ、党自身は自己の「一枚岩」としての統一的な立場からその諸領域に党独自の活動を展開し、この独自の活動の中へ共産主義的に教育された有能分子を吸収して行くという方針の徹底を図らなかつた。その結果かく領域に於ける党の独自の活動が、それらの領域の党外組織の活動に委ねられ、それらの党外組織に党的傾向及び統制を与えることになつた。聞くところにして誤解なければ、党民族部の活動は反帝同盟のフラクション活動に、党組合部の活動は全協の活動に解消し、他の労働組合には全協から全協のフラクションが入りこむという現象が起つている。党及び組合の煽動宣伝的文化的活動は、極度に縮少し、芸術及び科学団体の下にその任務が転化され、その団体の「ボルセヴィキー化」が行われている。党的統制と、党的任務の下に包括し得ない団体は、それを分裂せしめて、その下に立たしめ得る別派を形成せしめた（全農全国会議派の本部派からの独立）だが当然の成り行きとして、党的任務と統制の下に全体的に立たされた団体には必ず有力な反対派が生れた。全協は歴史的に刷新派その他の反対派の伝統が絶えない。全農全会の分裂もその一例。コップ諸団体の中最も有力な作家同盟は分派對立の結果解体し、次で有力なプロレタリア科学研究所（同盟）は既に以前に唯物論研究会を結成すべき諸分子を遊離した。さらに党は党外諸団体の客観的な必然性を充分に理解しないで、それらを破壊し、党或は社会主義の側に立つ諸分子を反動の側に立たしめることもやつた。例えば労働党の否定、新幹会（朝鮮民族主義団体）の解体等。コミンテルン及びその諸党の戦術を二、三言で片づけることは、誤解を生むばかりである。以上は党派性イデオロギーの影響する一般的な様相に触れたのみである。レーニンの死後も有能な政治的手腕家があつた。だが深遠な政治的思想家がなかつた。思想が手腕の尻尾を追うに到つて、党派性イデオロギーが思想を支配することとなり、党派性イデオロギーが階級運動を支配することとなつた。

#### 四 （結語）客観的無党派の理論研究の意義

理論の党派性に対する結論を述べよう。

曰く、科学的真理、真正の科学的理論は、階級性、党派性を有しない。弁証法的唯物論は、俗人によって、プロレタリアートの哲学或は理論と呼ばれている。だがそれは、人類の科学的思想の必然的な合理的な発展の結果として生れたものであつて、弁証法的唯物論の背景には、プロレタリア的党派性なるものはない。その背景には、人類の実践の總成果、人類の理論的思考の總成果が横たわる。人間の思惟の根本法則に従つて思考することを弁えている成心なき科学的、研究家ならば彼の出身党派、所属階級の如何を問はず弁証法的唯物論の世界觀を豊富にしその発展に寄与するものである。プロレタリアートは、自己がプロレタリアートであるという資格によって、科学的理論、或は弁証法的唯物論の建設者たり得るが如き條件を持っていない。逆に、プロレタリア的党派或はその党派と同じ立場にあるものと雖も彼が思惟の根本法則に従つて思考することを弁えている科学的研究家の資格なくして理論を云為することは、却つて理論の發展を阻止するものである。

要するに、階級性、或は党派性は、理論的研究の対象となり得るかも知れない。だが理論的、研究の條件とはならぬ。

然らば「理論の党派性」なる言葉の合理的意味はどこにあるか、理論が党派の党派結合と党派闘争とを党派の本来の意義に従つて指導するところにその理論の党派性は發揮される。即ち理論の党派性は党派の闘争の意義及條件の理論的闡明とそれに基く党派の政策的組織的任務の認識を指すのであつて、この闡明、この認識の深さの程度に応じて、理論の党派性の程度も定まるのだ。理論の党派性とは党派の理論、党派の指導理論の意である。

党派は理論研究の條件ではない。理論にとつては、党派はその研究対象であり、その研究の成果に従つて指導すべき対象である。

ブルジョアの理論、ファシスト的理論、プロレタリア的理論等は、それらの階級的立場に立つて世界（自然及び

歴史)を観じた結果生れた理論と解すべきではない。それはその当時の、或はその環境に於て与えられている理論的(科学的、哲学的)伝統に依存して、夫々自己の階級的立場の主張のために作り上げられた理論或は政策的考案を指すのである。科学的社会主義がプロレタリアートの理論である所以は、それがプロレタリアートの立場或はプロレタリアートの視角から見た歴史の認識たる点にあるのではなく、吾々に与えられている理論的伝統(弁証法、唯物史観、経済学等)に基いてプロレタリアートの歴史的使命、プロレタリアートの闘争の條件と戦術とを明らかにし、かくてプロレタリアートを最も合理的に指導する理論たる点にあるのだ。

ある短見者流が私の右の主張を批評して次のように言った

「かくの如きはプロレタリア階級のみが客観的真理を把握し得るものなることを抹殺し書斎丈で客観的真理が生産出来るし、またそうして得た成果を自己の階級に結びつけることはプロレタリア階級の勝手にすればよい(かくて党派の理論的指導力を否定する)という小市民的インテリゲンチヤの幻想に陥る。これは現実の闘争から遊離した日和見主義である。」(「唯物論研究」第一四号一二〇頁)

右に対して、最早更めて反駁する必要はない。眞の科学的理論は何等の党派的立場に立つものでもない。それは無党派的なることを以て特徴とする。そして人類の夫々の党派、民族階級集団層を夫々の意義と役割に従つて評価するものである。強いて言えばそれは人類全体の立場に立つものだ(参照、マルクスのフォイエルバッハに関するテーゼ「新しい唯物論の立場は人類社会である」)だが及一方から言えば、全宇宙に対する「人類としての」党性を主張するものでもない。眞正の科学的理論は人類をも含む全宇宙の客観的な発展法則の有の俛の認識以外の何者でもない。かかる科学は排他的にプロレタリア階級のみと結びつく性質のものではない。自然と歴史とを支配せんとするものはすべてこの科学の成果から指示を得なければならぬ。また自己を最も合目的に導かんとするあらゆる党派は、すべてこの科学の成果から指示を得て自己の行為を規制しなければならぬ。

真正の科学的理論の研究者は、自然と歴史の支配の課題を解決すべき槓杆こうかんを創るものに外ならない。それは幻想でもなく日和見でもない。槓杆こうかんに就いていえば、その使用方法を最もよく知るものが、最もよく自己の実践的課題を解決することが出来る。

(東京地方裁判所検事局に提出した手記)

- 『加藤正著作集』第二巻(「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年一二月)所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{\LaTeX}$ 2<sub>ε</sub>でタイプセットを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。